愛媛教職員組合（JTU えひめ）

2016年３月１日発行
（えひめ冬物語版）

愛媛教職員組合研修会
「えひめ冬物語」

２０１６年２月１３日（土）、研修会「えひめ冬物語」をホテルクラウンヒルズ今治で開催しました。その内容をお知らせします。

1　オープニングセレモニー　弾き語り ： ガチャピンの相棒

「電流」ガチャピンの相棒　詩・曲　　※電磁石を扱う単元の学習ソング

♫　電流　電流　電磁石だ　電流　　電流　電流　電気の流れが電流
エナメル線を　くるくる巻くと　　コイルというんだぜ
乾電池が１こと１こなら　　１００回巻コイルより２００回巻コイル
電磁石の磁力は強い　♫

♪ 研修会が盛り上がりました。♫

《参加者感想》

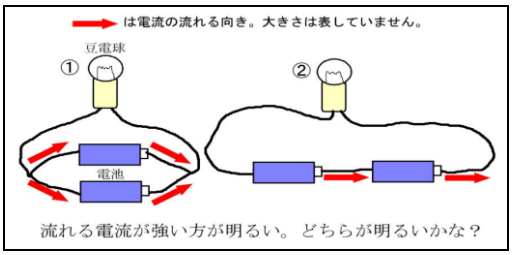
- 余裕を感じた。→　聞きやすい。人生を楽しんでらっしゃる。→　こちらも楽しくなる。
- 子どもに向けられた「電流」という歌がおもしろかったです。

2　実践交流

１．教科通信「三島小理科レポート２」　　報告：田中正史（小学校）
～その後の１年間の成果と反省～

毎日、通信を３～６年の学級と特別支援学級、教職員に配布を続けている。子どもとの対話を中心にしたレポートが減ったことに気づいた。授業で取り組み始めた理科日記の感想交流を行ったり、学年の枠を超えた感想リレーの実践を行ったりした。

「どう教えるか」で教員は消耗しきって「何を教えるか」の価値を考える余裕がなくなっていることに危機感。例えば原発事故の何を、私たちは子どもに伝えるのか。学力テスト実施の影響は組合員にも影響を与えている。「学力をつけないと、進学・就職が難しくなり生活が安定しない」という圧力が高まっている。その通りだとも思うが、別の幸せの形・社会のあり方へと転換しなければ、行き詰まるとも思う。私の教科通信は、「教科書から離れて」「学校から離れて」「日常の中の感性を高める」ことが出発点であった。原点に返りやり遂げようと思う。



理科レポートより：４年「並列つなぎをつくる」

《参加者感想》

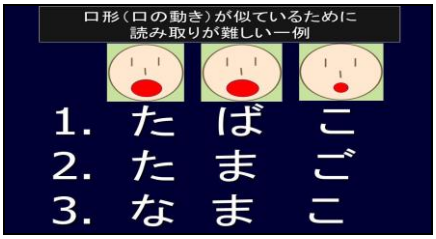
- 「どう教えるか」これも必要だと思う。VS「何を教えるか」を考えない危機感（日々の忙しさにかまけて考えてない。）
- 対話のレポートはとても興味を持ちました。対話の中に子どもの感性の気づきもあるし、たくさん会話も生まれると思います。その中で、日常での視野を広げるっていいなあと改めて感じました。

２.「聴覚障害」について　　報告：神野雅彦（特別支援学校）

① 聴覚に障害があること

「補聴器をつけているのだから、聞こえているんじゃないの？」と思うかもしれませんが、聞こえ方は人によって様々です。多くの場合、「音が聞こえていても(楽に)分かるということではない。」一見問題がないように見えても、特に言葉の理解は、聞こえる人が考えているより大変です。

② 聞こえないことの理解を求める難しさ



資料より：読みとりが難しい一例

聞こえないことで音声情報が入らず、不安になったり、性格等によっては情緒不安になったりすることもあります。耳が聞こえない・聞こえにくい＝聴覚障害ですが、聴力の程度≠障害の程度です。コミュニケーションの手段は実に多様です。聞こえなくなった時期や教育歴などが一人ひとり異なるからです。聴覚障害は一言で説明することは難しい。何かと誤解されやすい障害でもあります。

《参加者感想》

- 聴覚障害は理解されにくい障害であることを改めて感じました。簡単にまとめられて、分かりやすかったです。中学校までは地域の学校で生活しても高校となると一般の高校では支援が難しく課題が多いと思っています。
- （聴覚障害）専門的なお話を聴くことは大事だと感じた。実態について初めて聴いた。

３．特別支援学級での取り組み　　報告：加地理司（中学校）

① 作業学習　クリスマスツリー作りとロウソク作り。

② 体験学習　進学に向けて、公共交通機関（バス・電車）の利用の方法を学習する。買い物の代金や公共交通機関の料金の支払いを通して、お金の使い方に慣れる。食事の注文を自分でする。社会生活上のマナーや道徳心の向上を図る。

松ぼっくりのクリスマスツリー

《参加者感想》

- 教材となる松ぼっくりがどこにあるか常に考えているなど、生活の中で自然に教材研究をしている。
- 将来を見据えて、自分で移動ができるようになることなどを考えて、授業をしていくことを忘れないようにしたいと思います。

3　講　演

講師　是永　かな子さん（高知大学　教育学部　准教授）
演題　「特別支援教育とインクルーシブ教育」
―　合理的配慮の視点を踏まえて　―

講演中の是永先生

【講演内容抜粋】

① 個別の指導計画、個別の移行支援計画への反映

全員に共通なことは「基礎的環境整備」です。そうではなく「個別」の合理的配慮を具体化すること、そして個別の計画による支援方法を続けることが大切です。

② 本人の要望聴取

支援に関して本人にも聞いてみます。聞き方には工夫が必要です。本人が言えない場合や言わない場合は、本人の行動から分析して判断します。発達の最近接領域を意識して本人の動機付けや、理想と現実のすりあわせを意識します。本人が意見を言える「当事者」に育てます。

「どんな学校だったら行けますか。」と本人に聞き、そんな学校をつくります。本人の力が伸びたら支援を減らし柔軟に学校を選択変更できるようにします。

③ 意欲を高める方法

まず、取り組むべき課題の価値の認識（動機付け）です。次に「できそう」という期待感。そして、これに伴う感情です。「楽しい」とか、先生やまわりからの賞賛や評価があることです。

④ 否定語ではなく肯定語で話す

学校ができること、学校でしかできないこと、集団でできるコミュニケーション指導、優しい言い方、返し方を教えるスキルをトレーニングします。

肯定語を使うと、優しい指摘になります。具体的なので、今すべきことがわかります。誘いかけることができます。制限、条件をつける。代替行動を考える。「廊下を走るな！」ではなく「廊下は歩きます。」です。「大声を出さない！」これだけでは、どうすればいいのかわかりません。「お話聞こうね。」です。「倉庫で遊ばない！」ではなく、「運動場で遊ぼう。」または「倉庫には大人と行きます。」です。何度言っても伝わらない時は「その方法では伝わらない」と捉えて、違う方法で伝えてみます。

具体的に・誘いかける・モデルを示す・視覚的に示す・ホワイトボードに書く・復唱させる

⑤ 学習内容を子どもにも示し、本人がわかって動ける環境づくり

学校ではできるだけ合理的配慮を多く提供する。そして就労に関わるときには、事業所との調整役を学校がする。事業所が過度の負担とならないように調整するコンサルテーションの立場にたつことも必要。支援が０か１００にしないようにすることが大切。合理的配慮の視点でこれまでの実践を整理していく必要がある。新しいことをする必要はない。

⑥ 公正さのためのテストでの配慮

設問番号や問題文を大きくします。問題を囲みます。記入する場所を明確にします。補助の紙を用意して計算に使えるようにします。１つの設問で１つの解答にします。問題によっては結果ではなく、考え方を問います。漢字にふりがなをつけます。などの配慮ができます。

⑦ インクルーシブ教育に関して

みんなの学校の認識です。（ドキュメンタリー映画）

大人は子どもの行動の善悪を判定しません。どうして、そんなことをしたのか、通訳をします。子どもの反省は、後で同じ事をくり返しても、「その時」は真実です。後は、反省の点と点をつなげていくことです。叱る時には演技か感情か。感情ならプロではありません。「怒る」と「叱る」には大きな違いがあります。授業のやり方をユニバーサルデザインに、極力排除のない教育の保障をめざします。支援が有効な子どもに対して支援の試行を始めます。「みんな同じでないよね。」が前提。

《参加者感想》

- スキル的なものでなく、長期的に子どもたちへの視点、まなざし、関わり方など、大切にしたいことが学べました。明日からやってみよう、これは大事にしたいと思う内容がたくさんありました。文字では、だいたいこんな感じと思っていたことが、具体的な例や現場の様子などで、理解が深まりました。
- 具体例をまじえての講演で、とても分かりやすかったです。合理的配慮について、校内でも考えていきたいと思いました。ありがとうございました。
- 最高！またお願いしたい。（お聴きしたい。）学級にいる発達障害的なお子さんに（複数人いると崩壊しそう…。）先生方は疲弊しきっています。
- ケーキの二周目、スロープの雪かき（講演の中で示された具体例）の話など、とてもわかりやすかったです。学校に帰って伝えたいと思います。肯定語で話す練習をしたいと思います。自分の意見を表出できる子どもに育てていきたいと思いました。
- 子どもに注意する時に「～しません！」という否定語を使っていました。例えば「おしゃべりしません！」というマークを机に付けましたが、それを肯定的な言葉に変えようと思いました。「休み時間におしゃべりしょう！」とか。今までの注意の声かけで実践してみようと思いました。また、別にかまってほしくない子どもも居るけれど、ほめてあげる。その調整加減も必要なのだと感じました。

◆◇編集後記◇◆

特別支援教育担当者の方をはじめ、研修会にご参加のみなさんありがとうございました。明日から使える、明日への元気を取り戻せる研修会になりました。

若年研修取組資料の当日配布もありがとうございました。

子どもたちと教職員の生活を守るため、共に考えましょう!

私たち愛媛教職員組合は、年に数回、研修会（研究会）を開催し現場での力量を高めています。ぜひ、ご参加いただき共に学びましょう。

質問や感想がございましたら、ご気軽にご連絡ください。

TEL(089)924－4546　／　FAX(089)924－4403　／　e-mail　jtuehime@lime.ocn.ne.jp
HP http://jtuehime.sakura.ne.jp/

愛媛教職員組合　書記長　堤　　剛